
中庭の天使

kanon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

中庭の天使

【Nコード】

N8699U

【作者名】

kanon

【あらすじ】

俊が通う高校は、制服も、学力も、平均的で、平凡。しかし、一つだけ、自慢できることがある。それは、中庭にある、立派な噴水。遠い昔、天使が舞い降りたという伝説があるのだ。それ以外は特にこれといった特徴もなく、退屈な日々を送っていたが、ある日、転校生の沙輝に出会ってから、俊の高校生活に、少しだけ変化が起きる。平凡な高校には似合わない、天使のような美少年、沙輝とは一体……？

噂の転校生（前書き）

天使、とは、私にとってはすごく魅力的な存在です。どんな姿で、どんな声なのか。とても手の届かない存在なのか、それとも身近な存在なのか、想像は尽きません。このお話の中で登場する天使が、みなさんの想像に近いのか、遠いのかとても気になります（笑）。

噂の転校生

噴水の水が、止まっている。全ての音が消えた空間は、シン、と静まり返り、時間さえも、止まったように感じた。三階建ての古い校舎に囲まれた中庭には、白いタイルが敷き詰められ、薄曇りなのに眩しいほど明るい。いや、まだ、夜明け前なのだろうか。微塵も大気の動きがないことに、ふとそう思った。風も、まだ眠っているのだ。歩くと、まるで水の中のように、肌に抵抗を感じる。その感覚を楽しんでいたが、ふと、足を止め、辺りを見渡す。他に人の姿は見えないのに、校舎の壁に靴音が反響し、もう一人、誰かいるような気がした。

俊は止まった噴水に近づいて行った。天辺に、白い、翼のある少年が、まさに今、降り立ったような彫刻。何て綺麗なんだろう。しばらく見とれていたが、ふと気がつくと、鏡のようだった水面に、波紋が広がっている。その同心円の中心に、真っ白な羽根が、浮かんでいた。咄嗟に見上げたが、羽根の主は飛び去った後なのか、それとも白く眩しい空に同化してしまったのか、その姿は見当たらなかった。俊はその小さな羽根を拾い上げ、ポケットから取り出した手帳に、挿んだ。

舗装の悪い道路のあちこちに、空色の水たまりができていた。ようやく、梅雨明けらしいが、皆が期待していた清々しい晴天を通り越して、既に顔をしかめるほどの暑さ。いつからか、梅雨明けが夏の始まりになってしまったことを、今、思い出した。自分の他に傘を手に行っている生徒がないことに、今朝、天気予報を確認しなかったことを後悔する。きっとこの傘は、下校時には持って来たことを忘れられて、置き傘になってしまっただろう。そんなことを

想像しながら、俊は校門をくぐった。

今年の春、高校に入学して一変した生活も、制服とともに、徐々に体に馴染んできた。比較的、不真面目な生徒が少ない、公立高校。学力は標準的、制服も、ありがちなブレザーで、他の高校のそれと大差なかった。ただ一つだけ、他校との差別化を図れるとしたら、嘘か本当か、校内の広い中庭に、天使が舞い降りたという伝説の噴水があることくらい。誰かの作り話には違いないけれど、この学校の歴史の古さや、ギリシア彫刻のような白い天使の像の見事さに、妙な信憑性を帯びて伝えられていた。

「見た？見た？」

教室では、女子たちが異様に騒いでいて、聞き耳を立てなくても容易にその内容が聞こえてくる。

「カッコイイ、っていうか、キレイだよな、」

「天使だったりして！」

俊は鞆の中身を机に移しながら、噂の中身を把握した。昔は今の倍ほども生徒がいて、ちょうど一階が一年生、二階が二年生、というように分かれていたのだが、生徒が減った現在は、一階に二年生の教室もある。そこに、転校生があつたらしいのだ。自分のクラスの中の噂にも疎い俊には、違う学年のことなど知る術もないが、こうやって、近くで騒ぐ女子の会話から得た知識で、ようやく日常の会話についていくことができる。

「どうせ転校してくるんだつたら、女がよかつたよな、」

友人の竜志りゅうじが声をかけてきた。席が隣同士で、クラスに一人も知った顔がないという共通点から仲良くなった彼は、最初、その竜の志という大層な名前に触れ、平凡な子供になってしまったことを後悔していると言って、俊を笑わせた。

「でも、ホントに綺麗な顔してたよ。制服着てるから男って解ったけど、」

先日、校内を案内されている姿を、偶然見かけたという。どうやら、稀に見る美男子らしく、女子たちの声も、いつにも増して甲高

かった。竜志はその騒がしい連中を横目に、

「まあ、俊も広い意味では、同類だけどね」

「……、気にしてるのに」

予鈴が鳴り、俊は竜志を睨んで前を向いた。この顔のせいで、短髪が似合わない。今、一番の不満は、それだ。小さい頃は、女の子に間違われても何とも思わず、親戚や近所の人から、可愛い、可愛い、とチヤホヤされて、いい気になっていたが、成長とともに、それは確実に、コンプレックスに変わりつつある。

「はあ……。せめて、背が高かったらな……」

思わずそう呟いて、竜志に笑われ、俊は大きく、溜め息をついた。

放課後、日替わりの掃除当番を終えて下駄箱に向かうと、雨の匂い。梅雨の雨雲はまだ残っていたようで、大粒の雨が乾いた地面をまだらに染め始めていた。置き傘にならずに済んだ傘を手に帰ろうとしたが、昇降口の庇の下に一人の男子生徒の姿があり、足を止める。今朝の晴天に騙された一人なのだろう。恨めしそうに空を見上げていた。俊が近づいて行くと、

「外に出た途端、降り出すなんて、」

そう言って、困ったように笑う。見たこともないほど、綺麗な、

容姿。一目で、噂の転校生だと、解った。

「……良かったら、一緒に帰りますか？」

先輩と解っていた俊は、一応、敬語を使ってみた。

「ホント？ありがとうございます！」

変に遠慮をすることもなく、嬉しそうに駆け寄ってくる。彼のほうが長身で、僕が持つよ、と、俊から傘を取り上げた。駅までの道を歩きながら、お互いの自己紹介をし、彼が川村沙輝（さわ）という名前で、今日が初めての登校日だったことを知る。

「父が転勤の多い仕事で。これが初めてじゃないんだけどね、」

うまく馴染めるかどうか不安で、天気予報を見る余裕がなかった、と語った。転校の経験がない俊にも、その緊張は解る。ついこの間、

入学式で味わったばかりだったから。そう感じる必要は何処にもないのに、自分だけが余所者のような気分になる。沙輝はそれを、もう何度も経験しているのだ。

「実は、駅までの道も、ちょっと不安だったんだ。俊がいてくれて、ホントに助かったよ」

駅に着き、彼はホツとしたようにそう言って、可愛らしい笑顔を向ける。初対面なのに驚くほど話しやすく、これなら新しい環境にも簡単に馴染めるはずだ。俊は他人事ながら安心して、自分とは逆方向の電車に乗り込む沙輝を見送った。

羽根の下で

想像していた通り、沙輝はあつという間に、全校の女子たちの憧れの的になった。何処へ行っても、川村先輩、川村先輩、という声が聞こえてくる。彼の、非の打ち所のない容姿は、女子たちが言うように、確かに綺麗だったが、別れ際に見せた、あどけない笑顔のほうに印象に残っている。男の自分に母性本能というのも変だが、笑うと途端に幼く見えて、年上にも関わらず、何だか無性に可愛いと思えた。

「ちよつと前までは、日に焼けたマッチョがいいって言ってたくせにな」

竜志が呆れたように言った。沙輝はその真逆で、長身だが線が細く、おまけに色白。肩に届くほど伸ばした髪は、中性的な容姿を際立たせるかのように、柔らかく上品な栗色をしている。だが、俊が思うに、きつと短髪が似合わないことを苦しめているはずだ。

「でも、前にいた学校と、レベルが違いすぎて、退屈なんじゃないかな、」

「……どういうこと？」

「川村先輩って、超有名なエリート高から来たらしいよ」

容姿だけでなく、頭も良いとは。天は人に二物を与えず、ということわざがあるはずだが、彼には適用されなかったようだ。若干の、というより、かなりの不公平を感じながら、どうしてこんな平凡な学力の高校を選んだのか、不思議になる。自由に選ぶことはできないにしても、それほどの学力なら、ある程度、融通は利いただろうに。転校などしたこともないくせに、勝手な想像をしてみる。

「あれ、」

教科書を取り出そうと、机の中を探っていた俊の指に、折り畳んだ紙のようなものが触れた。取り出してみると、それは……。

『こないだは、ありがとう。また一緒に帰ろうね。沙輝』

思いもよらないものだった。起立、という声が聞こえ、条件反射で立ち上がり、礼をして、再び腰を下ろすと、手の中のそれを、ジツと眺めてみる。くせのない、綺麗な文字は、彼の印象そのままだ。「何、それ。ラブレター？」

竜志が隣から、小声で話しかけてきた。

「そ、そんなんじゃないよ、」

必要以上に動揺して、そのうわずった声が教師に聞こえたらしく、私語はやめなさい、と叱られた。……あの雨の日から一週間。このクラスかまでは、話さなかった。もしかしたら、自分の机を、ずっと探してくれていたのだろうか。たつた一度、駅まで傘を共有しただけの後輩に、お礼を言うために。俊は、何だかとても大切なものを見つけた気分になり、その白い紙を、生徒手帳に挿んだ。

梅雨明けしてから、晴天続き。気温は日に日に上昇し、校庭や道路に、陽炎がゆらめいた。中庭を挟んだ北側の校舎はまだいいが、南側の校舎に陽射しを遮るものは何もなく、特に一階は、窓の外のコンクリートが発する熱で、せつかくの風が熱風に代わる。教師たちが交替で、そのテラスに水を撒いているが、熱さで瞬時に乾き、まさしく焼け石に水、といった感じだった。

昼休み、水が恋しくなった俊は、中庭へ赴いた。冷房のない教室も、外も、たいして暑さは変わらない。むしろ日陰なら、外のほうが涼しいくらいだ。しかし、そんなことを考える生徒は少ないのか、中庭は数組のカップルと、植木や薔薇の手入れをする作業服の男性がいるだけだ。炎天下にも関わらず、潤沢に溢れる水が涼し気で、誘われるように噴水の側に寄ると、水飛沫の中に虹が見えて、何だか得をした気分になった。

眩しいほどに白い天使の像は、いつ見ても見事だ。その広げた羽根の影にいと、ひんやりとした空気が心地良い。時折飛んでくる水飛沫が常にタイルを濡らし、熱を寄せ付けないからだろう。陽射しが反射してダイヤモンドのように輝きながら飛び散るのが綺麗だ。

俊は手を伸ばして、噴水の水に触れてみた。想像していたより随分冷たくて、気持ちがいい。

「見つけた、」

突然の声に驚いて振り向くと、そこに沙輝の姿。いつの間に忍び寄ったのか、全く気がつかなかった。

「こんなところに隠れて、何やってるの？」

「ここ、僕の特等席だったのに。と、少々悔し気に言う。真夏だというのに沙輝の肌は白くて、それだけで涼し気だ。それに、その柔らかい笑顔。俊は何だか、ホツとした。

「すぐく、深いところから汲み上げてるから、冷たいんだよ」

俊と同じように、噴水の水で手を濡らしながら教えてくれた。水道水だとばかり思っていたが、地下から汲み上げていたとは。転校してきたばかりの沙輝が、そんなことを知っているととは思わず、驚いていると、

「あの人か、言ってたんだ」

そう言って、作業服の男性を指差した。庭師、というのだろうか。祖父と変わらない歳に見える。もしかしたら、この中庭を作ったのは、彼なのかも知れない。そんなことを思いながら、しばらく、黙々と作業をする姿を見つめていた。

「あの、また来てもいいですか？」

予鈴が聞こえ、俊はそう口にしていた。

「もちろん、」

さっきのは、冗談だよ、と笑う。

「それより、敬語なんて、やめてよ。一つしか変わらないんだから」彼は、やたらと先輩風を吹かせる他の二年生とは大違いだった。

中学の頃から思っていたが、学年が一つ違うだけで、まるで身分が違うかのように振る舞う連中が、俊は大嫌いだ。そういう風習は学力が平均以下の高校だけで、エリート高には存在しないのだろうか。先輩と並んで廊下を歩くことに慣れなくて、彼の教室の前で手を振る沙輝に、お辞儀をした俊は、走って自分の教室に戻った。

綺麗な友達

期末試験が終わり、全校生徒が通る、下駄箱の前のボードに、上位二十名の名前を書いた紙が、貼り出された。俊の名前はそんなところにあるはずもなかったが、最も人だからのできた二年生の順位が気になって、足を止める。

「川村くん、すごいね。ほぼ満点だよ」

そんな声に、見なくても解ったが、一応、人の隙間から覗くと、一番上に、川村沙輝の名前。教科ごとではなく、総合計のみの順位だったが、内訳など見なくても、間違えたのは一問か二問だろうと想像がついた。しかも、二位との差が大きく開いていて、彼が飛び抜けて頭が良いことは、一目瞭然。一体、頭の良い人と自分は、どこが違うのかと真剣に考えてしまう。同じように生まれて、同じ時間をかけて育ってきたはずなのに、この格差はいつ出来たのか。暇さえあれば昼寝をしている自分が原因だとは、これっぽっちも思わずに、俊は溜め息をついた。

授業が始まって十分と経たずに飽きた俊は、席替えで窓際の席になったのを良いことに、グラウンドを眺めた。この暑いのに、走り高跳びをする生徒たちが、一人飛ぶごとに、大袈裟な歓声を上げている。そこに、沙輝の姿を見つけた俊は、チラッと教壇のほうを窺ってみた。古文の教科書を、呪文のように唱える教師の声が聞こえている間は、余所見をしても大丈夫だ。安心した俊は本格的に、窓の外に集中し始めた。

笛が鳴り、沙輝が走り出す。それほどスピードを出しているとは思えないのに、フワリと浮いたその体は軽々と、彼の背丈ほどのバールを越えていった。また、大歓声。俊も思わず声を上げそうになつて、慌てて前を向いた。エリートというのは、運動ができないはずだったが……。彼にないものは、いったい何だろう、と、首を傾げる。それにしても、綺麗なフォームだった。陸上の知識など皆無で

も、それくらいは解る。まるで重力など関係ないかのように見せる脚力は、相当なものだということも。

羨ましさに溜め息をついた頃、チャイムが鳴って、驚いた。そんなに長い間、グラウンドを眺めていたのだろうか。俊は自分に呆れながら、古文の教科書を机に仕舞った。

夏休みを目前にして、生徒たちは当然、落ち着きがなくなる。いつ海へ行くか、だの、何処でバイトをするか、だの、大体、どのクラスも同じような話題が飛び交う。俊の周りでも、どうせバイトをするなら、可愛い店員がいる店がいい、と馬鹿げたセリフが聞こえていた。

「俊は？どこでバイトすんの？」

竜志に尋ねられ、俊は首を横に振った。

「ウチは、禁止なんだ。わけ解んないよ、」

「そんなの無視してやっちゃえば？」

そうできたら、とつくにそうしている。お金が欲しいという理由なら、小遣いを増やしてやる、とハッキリ言われて、二の句が継げなかった。

「じゃあ、社会勉強、とか言えばいいのに」

女子たちも、いろいろとアドバイスをくれたが、それらは全て、既に却下されてしまった内容だった。労働は、社会人になったらイヤというほどできるから、今はやめておきなさい。毎日残業で深夜に帰宅する父親に言われたら、素直に頷くしかなかった。

「夏休み、長いんだろうな……」

友人たちが皆、バイトで忙しくなれば、当然、俊は暇になる。去年まではあり得なかったセリフを吐いて、俊は窓の外の、真っ青な空を睨んだ。

簡単な終業式とホームルームを終え、竜志たちと一緒に下駄箱ま

で行った俊だったが、今日が掃除当番だということを思い出した。遊びに行くなら誘って、とだけ言い残して別れ、急いで職員室へ向かう。この高校は、生徒をよほど信用していないのか、掃除道具入れの鍵を職員が預かっていて、取りにこなければ掃除をしていないことが解ってしまうため、掃除当番は必ず、職員室へ赴かなくてはならないシステムになっているのだ。

さっさと終わらせて帰ろうと、担任から鍵を受け取り、職員室を出た俊は、視界の端に気になる光景が映って、足を止めた。

『沙輝？』

中庭を見下ろす二階の渡り廊下に、一人の男子生徒の姿があった。手摺にもたれ、天使の像を見つめている。それが遠目にも沙輝だとすぐに解ったことより、普通ならすぐにも逃げ出したい場所に、いつまでも留まっていることのほうが、気になった。

『どうしたんだろ？』

教室でホウキを適当に動かしながら、考える。

『もしかして、いじめられてる、とか』

あり得ない話ではない。季節外れの転校生で、並外れた学力と、その容姿。同級生に妬まれる要素は幾らでもある。

『それとも、待ち合わせ？』

誰もいなくなった校舎で、コツソリ会う相手といえば。彼は美男子だから、教師から言い寄られることもあるのかも知れない。断れば、成績を下げる脅されて、無理矢理関係を持たされた女子高生が、教師を訴えたというニュースを思い出した。心配になった俊は、ホウキを教室に放置して、二階の渡り廊下を目指して走った。

そっと、渡り廊下へ出る硝子戸を開けると、そこにはまだ、沙輝の姿があった。ジッと、思い詰めたような表情で、天使の像を見つめていたが、俊に気付いて驚いたような顔になる。

『どうしたの？』

尋ねられ、答えに困った俊は、ただ首を横に振り、沙輝の隣に並んだ。丁度、噴水の上の天使の顔は、この場所と同じくらいの高さ

にあつて、大きく広げた羽根に手が届きそうだ。その左肩にとまった、小さな鳥の彫刻があるのだが、その姿はここからしか見えなくて、それを知ってから、俊は二階の渡り廊下を通るとき、いつも肩の小鳥を眺めるようになった。

「ここ、僕の特等席なのに、」

そう言つと、沙輝はやつと、笑顔を見せてくれた。何だかそれが嬉しくて、俊も笑う。

「綺麗な、天使だね」

沙輝は、まるで愛おしいものを見つめるかのような瞳で、天使の横顔を見ていた。どうやら、この天使の像に惹かれるのは、自分だけではないようだ。俊は、天使に負けにくいくらい美しい沙輝の横顔を、見つめた。

「夏休み、暇だったら、一緒に遊ばない？」

帰り道、沙輝はそんなことを言った。バイトが禁止で、やることがない、と笑う。それでようやく、俊の中のわだかまりが解けた。

自分も同じだと打ち明けると、沙輝は嬉しそうに、

「良かった。遊べる友達がなくて、寂しかったんだ」

そのホツとしたような笑顔が、言いようもなく可愛らしくて、また顔が綻ぶ。先輩であるという意識が、親しくなりたいと思う気持ちを抑えていたが、どうやら彼は本当に、俊の友達になってくれそうだった。

「実はさつき、沙輝のこと、見かけて、……何だか心配になって、俊は躊躇いながら、そう口にした。

「心配？」

「あんなところに一人でいたから……、いじめられたりとか、してない、よね？」

その言葉に、沙輝は驚いたように大きな目をパチパチさせていたが、

「掃除当番で、鍵を返しに行った帰り、あんまり中庭がキレイだから、

ら、眺めてただけだよ、」

紛らわしくて、ごめんね、と謝る。そこで俊は、ようやく、思い出した。

「しまった、鍵、返すの忘れてた！」

掃除の途中だったということを、すっかり忘れていた。駅は目の前だったのに、俊はそこで沙輝と別れ、再び学校へと走り出した。また電話するね、と叫ぶ沙輝の声が聞こえ、振り返ると、俊に向かって大きく手を振っているのが見える。俊もそれに応えて手を振り、急いで教室に向かった。

秘密のお守り

夏休み、最初の登校日が終わると、友人たちは本格的にバイトを始めた。いよいよ、遊び相手がいなくなってしまうたが、俊が退屈の二文字を口にするよりも早く、嬉しい電話があった。沙輝が、一緒に買い物に行こうと誘ってくれたのだ。

「ホントは、買い物する場所が解んなくて。俊に教えてもらおうと思っただけだね」

待ち合わせ場所に現れた沙輝は、そう打ち明けた。が、そんなことよりも、彼の制服姿しか知らなかった俊は、そのラフな恰好が意外で、思わず見つめてしまった。

「よく言われるよ、襟つきのシャツを着てそうだった」

そんなの、暑くて着てられないよね、と、俊に同意を求める。白いTシャツに、ベージュのカーゴパンツ。そんなありふれた組み合わせも、沙輝が着ると、すごくサマになっているのが羨ましい。ふと、何かが光ったような気がして見ると、彼の左手の小指に、金色のリング。よく見ると、小さなクロス形の形に、淡いブルーの天然石が埋め込まれている。それが、太陽光をとらえて、光るのだ。

「綺麗だね、それ」

「お守りなんだ。生まれたときからついてて、絶対に、外れないんだよ？」

「え、」

思わず真に受けてしまった俊を見て、沙輝は声を立てて笑った。

「冗談に決まってるでしょ、」

「なんだ、もう……」

この綺麗な少年が言つと、あり得ないことも、真実に聞こえる。そこにまた、不公平を感じてしまう俊だったが、

「俊は、何かお守り、持ってる？」

尋ねられて、誰にも言っていないなかったが、沙輝になら打ち明けて

もいと思ひ、こう口にした。

「天使の羽根」

「天使の、羽根？」

意外なものだったのだろう。沙輝は目を丸くしている。彼はまだ、知らないのだろうか。中庭の天使の伝説を。

「天使、って、何処に行けば逢えるのかな、」

そう言いながら、沙輝は俊の瞳を、痛いほどに見つめた。俊は意味ありげに、微笑んでみせる。

「もしかして、俊、……知ってるの？」

「知ってるよ？」

「……何処？」

まるで、その居場所を探し求めているかのように、真剣な眼差し。それで、さっきの仕返しができたことに満足した俊は、こう答えた。

「学校の、中庭」

「……なーんだ、ホントに知ってるのかと思っちゃったよ」

頭は良いかも知れないが、疑うことは、知らないようだ。沙輝は膨れていたが、ふと思いついたように、

「そういえば、文化祭でね、天使の恰好してくれって、頼まれたんだ。僕、そんなのばかり、」

不本意そうな様子が可笑しい。前の高校では、女装させられた拳げ句、メイクまでされて、恥ずかしかったと言うが、きつと誰よりも綺麗だったのだろう。

「でも、天使の恰好が似合う人なんて、そうはいないから。みんな楽しみにしてると思うよ」

お世辞でもなんでもなく、本当にそう思った。真夏の太陽の下で、彼の笑顔はさらに眩しく輝き、体が動くたび、キラキラと音が聞こえる気がする。本当に、天使なのではないかとさえ、思えた。

真っ白な、眩しい空間で、俊は目が覚めた。ここは何処だろう。

光の粒子が邪魔をして、辺りがよく見えない。それに、自分は一体何をしていたのか……。考えながら、何度も瞬きをする。聞こえてくるのは、梢のざわめきと、鳥たちのさえずり。徐々に目が慣れてきて、赤やピンクや黄色の綺麗な色が視界に現れた。そして、そよ風に乗って届く、甘美な香り。薔薇の花だ。

俊はしばらく、その淡い香りを楽しんでいたが、何かとても大切なものを探していたことを思い出して我に返った。記憶の底に眠るその姿は、まだ見えなかったが、俊は立ち上がった。行き先は？いや、ここで、誰かと待ち合わせをしていたんだっただかな。考えているうちに、再び、瞼が重くなってくる。まあ、いいや。ずっと、ここにいたんだから。もう少し眠れば、思い出すだろう。そんなことを思いながら、俊は再び、眠りについた。

沙輝の屈託のない性格のおかげで、俊はもうすっかり、彼の友達になっていた。遊び相手がいなくて、ふて腐れていたのが嘘のように、楽しい夏休みを送っている。何より助かるのは、沙輝が夏休みの宿題を手伝ってくれること。いつもなら、二学期が始まる間際になって、半泣きになりながら机に向かっていたが、今年は違う。沙輝は面倒見の良い兄のようで、彼からしてみれば簡単すぎてあくびが出るような問題に呆れることもなく、優しく、丁寧に、教えてくれた。一人っ子の俊には、それが嬉しくて、つつい甘えてしまっている。

聞くと、沙輝も兄弟はいないようで、俊の気持ちはよく解るよ、と、嬉しい言葉をかけてくれた。家にいても、話し相手がいない寂しさは、慣れれば慣れるほど、寂しいものだ。少子化が進んでいるとは言え、俊の周りには、大抵、兄がいたり妹がいたりして、未だに部屋を共有させられるのがイヤだとか、何かにつけて比べられるのがイヤだとか、羨ましい不満を口にする友人が多かった。

俊はそっと、テーブルの向かい側で自分の宿題をやっている沙輝

を、窺ってみた。迷うことなく、淡々とペンを走らせている様子から、彼にとってこの宿題が、全く意味のないものだということが知れる。

「俊？もう終わったの？」

突然顔を上げた沙輝と、目が合ってしまった。どうやら、気付かれていたようで、決まりの悪くなった俊は、俯いた。

「……まだ、」

すると沙輝は、そんな俊を咎めることなく、可笑しそうに笑う。立ち上がって、俊の後ろからノートを眺め、

「この問題ができたなら、プールに行こうか」

学校や塾でなら、まだやるのか、とウンザリするまでやらされるところだが、沙輝は、もう終わり？と、物足りなさが残る程度の量しか進めない。こんなペースで本当にいいのかと思っていると、

「少しずつ、やればいいんだよ。夏休みは長いんだから」

最後まで、付き合っただけよ。その言葉に安心した俊は、いつの間にか出来るようになった問題を最後まで解いて、プールに行く準備を始めた。

不思議な朝

何より好きな昼寝にも飽きてきた頃。あまりに寝てばかりいるせいで、朝、まだ陽が昇る前に目が覚めてしまい、時計を見た俊は、小さく溜め息をついた。午前四時。開け放った窓の外で、うつすらと、空に色が戻り始めている。俊は思い切って起き出し、着替えてコッソリ、外に出た。夜明け前の街に、まだ人の気配はなく、時間が止まっているかのようだ。行き先を決めていた俊は、そのまま薄暗い通りを歩いて、駅へと向かった。

始発が何時なのかは解らないが、列車は既に動き始めていた。滑り込むように、閉まるドアを擦り抜けて、ガラんとした車両に乗り込む。飽和状態しか知らなかった俊は、わざと横に長いシートの中の真ん中に、座った。間もなく数人の乗客を乗せた箱が動き出し、車掌の挨拶が聞こえる。窓からの景色を新鮮な気分で見ながら、その特徴的な抑揚のアナウンスを聞いていた。

いつもの街並みが、見慣れぬ景色に見えるのは、気のせいだろうか。もしかしたら、街は夜、全くその姿を変えていて、夜明けが近づくと、元の姿を取り戻すのではないのか。今は丁度、その狭間。普段は見えないものが、見えているのかも知れない。そんなことを考えてしまうほど、神秘的な空気が街を包んでいる。まだ半年も経っていないのに、既に退屈なものになってしまった通学路も、初めて見る景色のように、新鮮に映った。

しつとりとした朝靄の中を歩き、高校に辿り着くと、大袈裟なほど頑丈な金属製の門が、開いていた。部外者が入れないようにと、施錠しているはずだったが、教師たちも意外にいい加減なのかも知れない。俊は難なく、背丈の倍ほどもある校門をくぐって、迷わずに中庭へと向かった。しかし、中庭が近づくと、聞こえてくるはずの水音が聞こえない。夏休みの間は、噴水を止めているのだろうか。

噴水の周りは魔法陣のように白いタイルが敷き詰められ、さらにその周囲は色とりどりの薔薇が植えられて、そこだけ見ていけば、欧風の庭園の一角のようだった。晴れた日には、太陽光が白い床で反射して、まるで光のベールに包まれているかのように見える場所。今はそのベールを脱いで、ハッキリと、天使の像が見える。俊は、静けさに満ちた、白い空間を、歩いた。

鳥の声も、まだ聞こえない。ようやく明るくなってきた空の色が、中庭に面した校舎の窓に映っていた。俊は、白いタイルの上に散った、薔薇の花弁を集めていたが、ふと気になって、動きの止まった噴水の、鏡と化した水面を覗き込んでみる。知らない人の顔が映るかもしれない、と思ったが、そこには見慣れた自分の顔が映った。幾分、ガツカリして、手にしていた花弁を、映った自分の唇に載せてみる。そこから広がる波紋。……あの時の白い羽根は、どこにあるのだろうか。そんなことを思って、俊はハツとした。あの時も、噴水は、止まっていた。

靴音が聞こえて、顔を上げると、噴水の向こう側に、制服を着た沙輝の姿があった。いつの間に……？驚いて声も出せずにいると、沙輝はジッと、俊の瞳を、見つめる。いつもの笑顔はどこへ行ったのか、無表情なのが気になったが、それが余計に、彼の美しさを際立たせた。

「……沙輝、どうしたの？」

明らかに、いつもと様子が違う。いくら待っても、返事がなく、「ねえ、何か、変だよ。何かあったの？」

自分も人のことは言えないが、こんな時間に、こんな場所にいるなんて。休日に制服というのも、不自然な気がする。それでも答えない沙輝に、さすがに不安になってきた時、彼はさつき、俊がしたように、水面に薔薇の花弁を落とした。鏡の表面が揺れて、同心円を描いてゆく。その揺らぎは、俊の記憶の、最も深いところを刺激した。が、ハッキリとした形のあるものを見つけることは出来ず、

代わりに、ずっと心の中に仕舞っていた言葉を、取り出してみた。

「沙輝って、ホントは、天使なの？」

「……、」

「この天使の像は、沙輝なの？」

その瞬間、強い風が巻き起こり、薔薇の花弁が噴水を覆うように舞い上がる。思わず目を閉じ、再び開けると、そこに沙輝の姿はもう、なかった。

「沙輝！」

俊の声が、中庭にこだまする。風は一瞬にして何処かへ消え、その名残も残っていなかった。辺りの木々も薔薇も、何事もなかったかのように、静かにそこに立ち、細い枝の一つも、揺れていない。ただ、止まっていた噴水の水面に、細波が立っていて、たった今、動き出したようだ。あちこちから、鳥の鳴き声が聞こえる。

「……沙輝、」

俊はもう一度、その名を呟いて、呆然と、そこに立ち尽くした。

天使の伝説

澄んだ湖に天使が舞い降りた日、その美しさに、風さえも止まったという。歌うような声は花の色を鮮やかに輝かせ、真つ白な羽根が羽ばたくと、揺れる梢が鈴の音をたてた。暗い森は、まるでそこに光が灯ったかのようになり、明るくなった。しかし、森の生物たちは太陽の光を独り占めするかのようになり、彼の美しすぎる容姿を妬み、やがて彼を、排除しようとして画策し始める。

『やめようよ、そんなこと。あいつは、優しくて、いいヤツなのに』
白い小鳥だけが、反対したが、誰も耳を貸そうとはしなかった。
光は、生物たちにとって、かけがえのないもの。どんな存在にも平等に降り注ぐのに、強欲になって歪んだ目には、天使だけが光を浴びているように映っていた。

ある冬の新月の夜、一匹の痩せ細った狐が、天使にこう言った。
『子供が病気で死にかけているんだ』

湖の底に、金色の魚が眠っているはずだ。それを食べさせれば、元気になるのに。狐は細い目から涙を零しながら訴える。

『でも、泳げないんだ。誰か、代わりに行ってくれないものだろうか』

その様子はあまりにも哀れで、天使は快く、引き受けた。それが畏とも知らずに。影で見えていた白い小鳥は耐えきれず、飛び出して叫んだ。

『ダメだよ！そんなことしたら、死んじゃうよ！』
すると、狐が更に言う。

『今夜にでも、子供は死んでしまうかも知れないんだよ、』
天使は咽び泣く狐の前にひざまずき、優しい笑顔を見た。

『少しだけ、待っていて。きっと、魚を見つけてくるから』

天使は迷わず、その冷たい湖に近づいて行く。狐は薄笑いながら、小鳥は涙を流しながら、その闇の中でも輝く後ろ姿を見ていた。…

…澄んだ湖は、月の消えた夜、その姿を変える。この森に古くから住む者なら、誰でも知っていた。夏は何処までも深く侵入者を引きずり込む闇になり、冬はその鏡の水面に触れただけで、体が凍り付いてしまうことを。

「……中庭の天使は、舞い降りたときの姿じゃなくて、ホントは湖に入ろうとして凍り付いてしまったときの姿なんだ」

何処で聞いてきたのか、文化祭の準備の最中に、竜志がそんな話を聞かせてくれた。あまりにも悲しい内容に、俊は言葉を失う。想像以上に沈んだ顔をしていたらしく、竜志はこう付け足した。

「っていう芝居を、川村先輩のクラスがやるらしいよ」

「……なんだ、作り話か、」

俊は何だかホッとして、息を吐く。天使と沙輝を結びつけてしまうようになつていた俊は、たとえ作り話でも、悲しい結末は、聞きたくなかった。夏休み、約束通りに宿題を最後まで手伝ってくれた沙輝だったが、夢とも現実ともつかない出来事には、一切、触れようとはせず、俊もまた、口にしていなかった。もしかしたら、全ては俊の、夢なのかも知れないから。

「でも、何でそんなに詳しく、知ってるの、」

中庭の天使の伝説は、図書館にもその記録はなく、誰もハッキリとは知らないはずだった。ただ、この学校が建った時から人づてに伝わって、百年以上もの間、語り継がれてきた。その長い時を経る間に、伝説は少しずつその姿を変え、今に至っているのだろう。

「多分、おまえ以外、皆知ってるよ」

そう言っつて、女子のグループのところへ行き、小さな冊子を持って戻ってきた。それは、どうやって手に入れたのか、沙輝のクラスの演劇の資料で、今、竜志が話した内容が、そのまま綴られていた。『一晚、氷付けになつていれば、きつと死ぬだろう。そうしたら、湖の底に沈めてしまえばいい』

森の生物たちは、動けなくなつた天使を眺めながら、そう言つた。

しかし、夜が明けても、太陽が天辺まで昇っても、天使の体は凍り付いたままで、融けるはずの湖の表面も、硬く凍ったまま。生きるための水を失ったことに気付いた生物たちは、狼狽する。どうしてこんなことになったんだ？誰が天使を殺そうって言い出したんだ？口々に罵り合い、僅かな蓄えを巡って争った。そして、森の生物たちは、死に絶えた。

凍り付いた天使の目から、涙が零れ落ちる。影ですっと見ていた小鳥が、その凍った肩に止まると、みるみる、その小さな体も、凍り付いた。止めどなく流れる涙は、氷の湖から溢れて地面を濡らし、やがてそこに泉を作る。再び集まった生物たちは、水を与えてくれる美しい天使を崇め、泉の周りを、色とりどりの薔薇の花で飾った。尽きることのない水に、その森の生物たちはいつまでも、幸せに暮らし続けた。

暗い体育館の中が、割れんばかりの拍手で埋め尽くされたのは、その演劇が終わってしばらく経ってからだった。天使の悲しいほどの美しさに、観客は皆、心を奪われ、涙を流していたのだ。舞台の袖に沙輝の姿が消えても、それがただの芝居だったとは思えなくて、俊はただ、呆然と、暗転したステージを見つめていたが、徐々に体育館の外へと消えていく観客たちに急かされるように、席を立った。「しかし、凄かったな。まるで本物の天使だよ」

あちこちで、そんな声が聞こえていた。誰も、本当の天使の姿を知らなかったが、舞台の上の沙輝の姿こそ、天使に違いないと思えるほど、美しく、儚かった。氷の湖に捕われた沙輝の体は、決して凍り付いてなどいないのに、冷たく、心まで凍えそうに見えた。どうしてあそこまで、表現できるのだろう。俊にはただ、感心することしか出来ない。経験のないことを、演じて、観客に伝えるということ、とてつもなく難しいはずだ。

俊はクラスメイトたちとは合流せず、一人、中庭へと赴いた。これまで、噴水になど興味も示さなかった生徒たちが、その周りを

取り囲んで喋っている。俊は二階の渡り廊下へ移動して、その美しい天使の像を、眺めた。湖に触れた足の先から凍り付き、動けなくなった天使。肩には、小鳥が止まっている。憂いを含んだ眼差しは何処に向けられているのだろう。すぐ目の前の誰かを見つめているようにも、遙か彼方の星を見つめているようにも見えた。

「俊、」

その声に、驚いて振り返ると、そこに沙輝がいた。既に着替えて見慣れた制服姿に戻っていることにホッとす。

「ここにいないんじゃないかと思って」

沙輝はそう言って、俊の隣に並んだ。

「……凄かったよ、さっきの芝居。みんな、泣いてた」

まだ現実に戻りきれしていないことを感じながら、俊は口を開く。

「俊は？」

泣かなかったの？からかうように顔を覗き込んだ。俊は物語を、天使にとってもハッピーエンドにしたくて、こう言ってみる。

「天使は凍り付いてしまっても、たくさん綺麗な花と生物たちに囲まれて、寂しくなかったよね、」

明るい陽射しが降り注ぎ、美しい泉の水面で反射する様を思い浮かべた。

「そうだといいいんだけど、」

沙輝は何故か悲し気に言って、天使の像を見つめる。胸に残る、涙の余韻は、いつまでも消えなかった。

しばらく、並んで中庭を眺めていたが、俊はふと思いついて、胸のポケットから、生徒手帳を、取り出した。無くさないように挿んだ、沙輝からの手紙。それが、あるはずだった。しかし、そこから姿を現したのは、小さくて、真っ白な羽根。

「……それ、前に言ってたお守り？」

沙輝が尋ねた。頷きながらも、整理のつかない俊は、ただジッと、その羽根を見つめる。俊の体は、白い羽根を挿んだことも、確かに

覚えていた。夢の中だけで続く、物語。決して現実とは交わらないが、夢の中では、それが真実なのだ。毎晩見るわけではなく、忘れた頃に現れて、過去の夢の記憶と繋がってゆく。幼い頃から、そんな不思議な夢を、よく見た。

「夢だと、思ってた」

「夢？」

「うん。ここで、白い羽根を見つける夢を見たんだ。この高校に入るより、ずっとずっと前に」

記憶の奥深くに仕舞われていたその夢は、俊がこの高校に入学して、中庭の噴水の存在を知った時に姿を現し、ついに現実と交わった。しかし、羽根が手元にある今となっては、それが夢だったのかどうかさえ、曖昧だが。……それとも、これが、夢？

「天使の羽根、なのかな」

俊はその指先ほどの小さな羽根を手に取り、光に透かしてみた。

「天使の羽根なら、キラキラした粉が、付いてるはずだよ。羽ばたくと、その粉が飛んで、綺麗な音がするんだ」

沙輝はそんなことを言って、羽根を持った俊の手をそっと引き寄せる。小指の指輪のクロスが輝いて、綺麗な。

「ホラ、見て。粉がついてる。だからこれは、天使の羽根だよ、」
見ると、さっきは気付かなかったが、本当に金色とも銀色ともつかない、無数の細かい粒子が光っていた。驚いて沙輝を見つめると、
「あはは、また信じたの？俊は可愛いな、」

可笑しそうに声を立てて笑った。

「笑い事じゃないよ、ホントに、キラキラしてるじゃん」

俊は真剣に訴える。すると、沙輝は、フツと優しい気な表情になった。

「そうだね。それが天使の羽根かどうかは、天使に聞いてみないとね。でも、そんなに小さな羽根なら、あの小鳥の羽根かも、知れないね」

天使と一緒に凍り付いたという、白い小鳥。自らの意志で、天使

と運命を共にすることを、選んだ。

「彼はいつも、周りの目を盗んで、天使と一緒にいたんだ。小さいから、羽根の隙間にだって、隠れられる。……粉は、その時に付いたのかな、」

最後は呟くように言って、再び天使の像を見つめる。俊は沙輝の綺麗な横顔を、ずっと見つめていた。

新月の夜に

三日間に渡って行われた文化祭も、この後夜祭をもって幕を閉じる。教師たちが厳しく目を光らせている中、アルコールだけは絶対に禁止だったが、その他の大概のことは、許された。浴衣を着ていようが、着ぐるみを着ていようが、咎められることはなく、生徒なのか部外者なのかさえ、曖昧になる開放的な時間。秋の夜は途端に訪れ、グラウンドの真ん中に作られたキャンプファイアに火が灯されると、弾けて舞い上がる火の粉が幻想的な空間を生み出した。

ふと見上げると、月がない。今日は、新月なのだ。

「俊、何処行くんだよ？これから、いいとこなのに」

立ち上がった俊を、竜志が呼び止めた。今から各クラスの女子たちが、ダンスを披露することになっている。俊は、すぐ戻ってくると言って、走り出した。

キャンプファイアの火も、校舎に囲まれたこの場所までは届かない。壁の小さな明かりだけが中庭を照らしていた。

「やっぱり、」

噴水の水が止まっている。あの芝居は、作り話なんかじゃない、そう確信した俊は、噴水に近づいて行った。微かな明かりで、辛うじて、天使の足元が見えている。普段は天使の像の台座から跳ね上がるようにして流れ出る水が、その足元を隠していて、どうなっているのか知らなかったが、噴水のフチに立ち上がって、さらに背伸びをすると、左足の小指に、何か光っている。……指輪？もう少し、背が高ければ、見えるのに。俊は自分の身長を呪った。確かめたくても、これ以上は近づけない。噴水の水の中を歩いて台座によじ登れば、見えると解っていたが、俊は思いとどまった。……夏は、侵入者を深く引きずり込む闇に。冬は、触れただけで凍り付く罠に。秋は、どうなるのだろう。鏡の水面を覗き込んでも、それはただの水にしか見えなくて、俊は恐る恐る、手を伸ばした。

「俊、」

沙輝の声。

「今日は、新月だよ。その水に、触れてはダメ」

声はするけれど、姿が見えない。俊は必死に、目を凝らした。

「沙輝？何処にいるの？」

「ずっと、君の側に、」

鳥の羽ばたく音がして、見上げると、天使の肩にとまった小鳥が、舞い上がったかのように見えた。が、闇に慣れてきた視界に、いつも通りに静止しているようにも見える。ハッキリ確かめるために、渡り廊下まで行きたいけれど、その間にまた動くかも知れない。そう思っ、瞬きもせずジッと見つめていると、やがて後ろで足音が聞こえ、振り返ったそこにいたのは、沙輝だった。

「何処にもいないから、探したよ」

まるで、今、ここに来ただけかのような口調。俊が何も言えずに見つめていると、

「どうしたの？一人でこんなところにいて、寂しくない？」

本当に何事もなかったかのように、そう尋ねる。

「……沙輝、今、来たの？」

到底信じられなかったが、彼は、少しの間もなく、頷いた。たった今、交わしたばかりの会話が、夢？そんな馬鹿な。

「グラウンドのキャンプファイア、綺麗だよ。一緒に見に行こうよ」
誘われたが、俊は首を横に振る。

「噴水の水が、止まってるんだ。文化祭なのに……どうしてだろう、」

本当に尋ねたいことは、口には出来なかった。きっと沙輝は、伝説の真実を知っている。そして俊も、気付いていることがある。それは、前に噴水が止まっていたときも、側に沙輝がいたということ。まるで俊をその罫から、守るかのよう。

いつまでも黙ったままの沙輝をジッと見つめていると、彼は、手を伸ばして、その水面に、触れようとした。

「ダメ！さつき、自分でそう言ったでしょ、」

俊は慌てて、沙輝の腕を掴んだ。沙輝は、その静まり返った水面を見つめていたが、やがて小さく息を吐き出し、

「あの時、僕は、止められなかった」

「……、」

「でも、今、やっと解った。どうすれば、彼を止められたのか」

沙輝は真剣な眼差しを、俊に向ける。

「僕が、先に、飛び込めば良かったんだ。そうすれば、それが罫だつて、すぐに解ったはずだから、」

それが何のことを言っているのか、俊には解った。すぐに、冗談だよ、と、笑ってくれることを、祈っていた。しかし、どれだけ待っても、その言葉は、聞こえなかった。

「春の新月の夜に、湖に入ると、命と引き換えに、どんな願いも、叶う。秋の新月の夜に、湖に入ると、……全ての記憶を、無くしてしまうんだよ」

俊はただ、頷いた。そして、

「解った。もう、絶対、新月の夜には、近づかないから」

そう言わなければならぬ気がした。沙輝はようやく、笑顔を取り戻し、ありがとう、と、涙を零した。

白い羽根の君

文化祭の後、平凡な高校は、再び平凡な毎日に戻って、生徒たちはただ、日々の時間を費やして、退屈に過ごしていた。しかし、平凡な日々を過ごせることが、少しだけ、幸せに感じる生徒も、中には、いる。

「あれ、何それ？ラブレター？」

俊の背後で、竜志がわざとらしく、大きな声を出した。俊は慌てて、それを生徒手帳に挿み、ポケットに入れる。

「誰から？誰から？」

クラスの女子たちも、興味津々に、集まってきた。俊は諸悪の根源を睨みながらも、精一杯、平静を装って、

「そんなんじゃないよ。僕がそんなに、モテるはずないでしょ？」

自分で言っておいて、結構、傷ついた。女の子みたいな、童顔。幼稚園の頃から、顔が変わっていないと、よく言われる。そのせいで、短髪が似合わないのだ。

「じゃあ、見せてみるよ。ラブレターじゃないんだったら、平気だろ？」

そう言って、竜志が俊の胸のポケットに手を伸ばそうとした。その時、

「俊！迎えにきたよ。一緒に帰ろ？」

沙輝が教室の入り口で、俊を呼んだ。一斉に、皆の動きが止まる。

「え、川村先輩と、知り合いなの？」

「何で？何で？」

女子たちの甲高い声で、放課後の教室は騒然となった。

「いつから？ねえ、川村先輩といつから友達なの？」

羨ましそうに、尋ねられ、俊はこう答えた。

「もう、ずーっと、昔からだよ」

「なんで内緒にしたのよ？狡い！」

再び、女子たちが騒ぎ出す。その隙に、俊は鞆に教科書を詰め込んで、教室を逃げ出した。

「何だか、騒がしかったけど、何かあったの？」

廊下の端までも聞こえてくるクラスメイトの声に、沙輝が驚いている。

「沙輝からの手紙を、ラブレターだって、言われて」

すると、沙輝は急に寂しそうに、

「ラブレターのもり、だったんだけどな」

「え、」

俊は思わず、沙輝の顔を見た。今にも泣き出しそうに見えたが、どうすれば良いのか解らず、ただ、その揺れる瞳を見つめる。すると、途端に笑いながら、

「俊といると、飽きないよ」

どうやらまた、からかわれたらしい。俊は膨れて、胸のポケットに手をやった。

『放課後、教室で待っててね。沙輝』

綺麗な文字で、そう書いた紙が生徒手帳に挿んであるはずだが、確かめようとして思いとどまり、再び沙輝の隣に並んで歩く。

「どうしたの？怒った？」

少しだけ、不安げな表情もまた、可愛らしい。俊はからかわれたことの仕返しのつもりで、こう言った。

「沙輝って、可愛いね。色白で、髪が長くて、女の子みたい」

すると、俊の予想に反して、沙輝の瞳に涙が浮かび、溢れて零れ落ちた。言っただけじゃなかったかと、咄嗟に謝る。すると彼は首を横に振って、

「違うの、……嬉しくて。……よく、そうやって可愛がってくれたから、」

「……沙輝？」

沙輝の腕が、俊の体を抱きしめた。当然、廊下にいた生徒たちが、怪訝そうに二人を見ている。俊はただ、その腕の中で、沙輝が語る

物語の一節を、聞いていた。

『ねえ、どうしたら、君みたいに綺麗になれるの？』

白い小鳥は自分の姿が不本意で、美しい天使にそう尋ねた。

『僕、ホントは青い鳥になりたかった。そう言ったら、皆に、馬鹿にされて。色を何処かに、忘れてきたんだろ、って』

自分でもそんな気がするほど、真っ白な羽根。雪の日には、何処にいるのか解らないと笑われた。天使は元気のない小鳥を肩に乗せ、そっと撫でる。

『真っ白で、小さくて、フワフワしてて、可愛いよ』

『……、』

『僕は、こんなに可愛い友達ができて、嬉しいな』

その天使の言葉に、小鳥は喜び、美しい声で鳴いた。自分がこんなにも上手に歌えるということを、初めて知った。天使と小鳥はそれから、毎日のように同じ時間を過ごし、小鳥は少しずつ、輝きを取り戻していった。

きつと、凍り付いた天使は寂しくなかなかった。いつも肩に、大好きな友達がいたんだから。そう確信して、伝説はようやく、ハッピーエンドになった。帰宅した俊は、制服の胸のポケットから、生徒手帳を取り出し、机の上で、そっと開いてみる。そこには……
『やっと逢えたね。あの時のお礼を言いたくて、ずっと君を探してた。俊、ホントにありがとう。これからも、友達でいようね。沙輝』
幼い頃から、何度も夢で見た景色。見たこともない森の中で、目が覚めると、明るい陽射しに輝く、色とりどりの薔薇が、いつも淡い香りを漂わせていた。そう、いつも、同じ場所、同じ景色。ようやくその意味が解って、俊は天を仰いだ。……夢なんかじゃ、なかった。僕はずっと、眠っている。あの場所で。そして、君も。それ

なら、このままずっと、眠っていたい。君と出逢えたこの幸せな夢が、続くから。

白い羽根の君（後書き）

いかがでしたか？

皆様が想像する天使の姿からは、多分、遠かったのではないかと思
います（^^；

色んな人間がいるように、色んな天使がいてもおかしくない、と思
って書きました。

最後まで読んでくださった皆様、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8699u/>

中庭の天使

2011年7月28日03時32分発行